第22回日本エイズ学会シンポジウム記録

エイズ診療，これからの重要課題　―AIDS関連悪性リンパ腫

前田　裕弘（近畿大学医学部血液内科）
岡田　誠治（熊本大学エイズ学研究センター予防開発分野）

抗HIV-1薬の普及とともにHIV-1感染者の予後は明らかに改善し，合併症の種類や頻度も変化している。近年，特に悪性腫瘍の合併が増加しており，本邦においても非ホジキンリンパ腫の合併が増加している。AIDS関連悪性リンパ腫は，通常のリンパ腫と比べて診断が難しく治療困難で予後不良であることが多く，HIV-1感染者の生命予後を規定する因子として重要である。シンポジウムでは，7人の演者により，本邦におけるAIDS関連悪性リンパ腫治療の現状から今後の治療体制の構築についての議論が行われた。

1.　HIV関連悪性リンパ腫の症例提示

上平朝子（国立病院機構大阪医療センター免疫感染症科）
四本美保子（東京医科大学病院臨床検査医学科）

2施設からの症例を提示して検討を行った。1）しばしば病理診断が困難である，2）節外リンパ腫が多い，3）日和見感染合併例が多く治療困難である，4）抗腫瘍薬，抗HIV-1薬，日和見感染治療薬の薬剤相互作用を考慮して治療をしなければならない，などAIDS関連悪性リンパ腫特有の問題点が浮き彫りにされた。

2.　AIDS関連非ホジキンリンパ腫におけるHAART併用EPOCH療法

味澤篤（東京都立駒込病院感染症科）

AIDS関連非ホジキンリンパ腫の標準的治療法はいまだに確立していない。そこで，HAART併用Dose adjusted EPOCH療法を行い，日本人におけるその有効性について検討した。駒込病院入院症例11例に治療を行い，CR5例，PR4例，PD2例という結果を得た。HAARTは，抗腫瘍薬との相互作用が比較的少ないd4T＋3TC＋NFVを使用した。HAART併用EPOCH療法は，本邦においても有用な治療法であることが示唆された。

著者連絡先：味澤　篤（〒113-8677　東京都文京区本駒込3-18-22　東京都立駒込病院感染症科）
2009年5月9日受付

3.　難治性・再発性AIDS関連リンパ腫に対するサルベージ療法

萩原將太郎（国立国際医療センター戸山病院血液内科）

AIDS関連悪性リンパ腫において，初回治療不応例や再発例の予後は極めて不良である。難治例・再発例に対するサルベージ療法として確立されたものはない。そこで，自己末梢血幹細胞移植療法を試み，移植に成功した5例中4例が現在まで寛解を維持している。自己末梢血幹細胞移植により，難治例・再発例も長期生存が期待できると考えられる。

4.　悪性リンパ腫の臨床　―エイズリンパ腫と非エイズリンパ腫

永井宏和（国立病院機構名古屋医療センター血液内科）

全国のエイズ拠点病院と血液研修指定施設にアンケート調査を行ったところ，AIDS関連悪性リンパ腫を経験している施設において，治療法の選択や治療担当科などで苦慮している現状が浮かび上がった（Int J Hematol 87 ; 442, 2008）。今後，全国規模での治療体制の整備と日本人に適した標準的治療法の確立が必要であることが示唆された。

5.　EBV関連悪性リンパ腫における細胞学的特徴

笹川淳（近畿大学医学部附属病院血液内科）

AIDS関連悪性リンパ腫の約半数にEBウィルス感染が合併しており，EBV再活性化はAIDS関連悪性リンパ腫の重要な発症要因のひとつである。HIV感染者末梢血単核球にEBVを感染させて樹立したLymphoblastoid B cell line（LCL）は，非感染者由来のものと比べて一部の接着因子の発現が亢進していた。この事実は，エイズリンパ腫が非エイズリンパ腫に比して多臓器に浸潤する可能性を示唆するものである。

6.　AIDS関連悪性リンパ腫の治療戦略

岡田誠治（熊本大学エイズ学研究センター予防開発分野）

AIDS関連悪性リンパ腫は，AIDS指標疾患として位置づけられる。AIDS患者剖検例の10-30%に悪性リンパ腫の合併が認められるなど，HIV-1感染者の長期予後を規定する最重要因子となっている。AIDS関連悪性リンパ腫は，

治療困難例が多いことから，その治療には血液腫瘍内科医とエイズ治療専門医の有機的な連携による集学的治療体制の構築が必要である。

まとめ

AIDS 関連悪性リンパ腫は，本邦においても発症が増加しており，HIV-1 感染者の長期予後を規定する重要な合併症である。また，治療困難で予後不良例が多く，治療には AIDS 特有の合併症や抗 HIV-1 薬についての理解が必要である。今後，日本人に最適化された標準的な治療法の確立と本邦における「治療指針」の確立と普及により，長期予後の改善が期待される。